

旭川医科大学基金

平成 29 年度 活動報告書

Asahikawa Medical University Fund
Annual Report 2017-2018

ご挨拶

平素より旭川医科大学の活動にご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。
本学は、1973年の建学以来、一貫して「地域医療に根ざした医療・福祉の向上」を理念に掲げ、「医師・看護職者の育成」、「研究の推進」、「地域医療の充実」のため、積極的に活動を展開してまいりました。その成果は、教育・研究・診療・社会貢献のいずれの面におきましても多大なものがあると自負いたしております。これもひとえに、地域の皆様のご支援の賜物と存じ、深く感謝申し上げます。

しかしながら、広大な北海道の医療を取り巻く状況には、医師の偏在に伴う地域間の医療格差や超高齢社会など、依然として厳しい課題も残されております。本学が皆様の期待に応え続けるためには、地域医療に貢献できる医療者や研究者の養成の拠点として、また、地域医療を支える中核病院として、今後、ますますの充実・発展を期していかなければなりません。

本学は、自らに課せられている役割・責任の重さを痛感し、教育・研究・医療・社会貢献のすべての面で一層の充実・発展を図り、今後も新たな挑戦を続けていく所存ですが、そのためには、より安定した財政基盤の確立も必要となってまいります。

そこで本学は、2016年10月に独自の「旭川医科大学基金」を創設し、地域の皆様に広くご寄附をお願い申し上げることいたしました。

本学は2023年に創立50周年を迎えます。さらにその先も見据え、地域の皆様に医療・福祉を通じて幸せで豊かな人生を送り続けていただくために、私共一同、さらなる努力を惜しまない所存でございます。何卒、「旭川医科大学基金」へのご理解とご協力を切にお願い申し上げます。

旭川医科大学では、2004年4月の法人化を契機に、未来の教育・研究・診療の中核となる学生や若手研究者への支援を行うことを目的として「学術振興後援資金」を設立し、募金活動及び支援事業を行ってまいりましたが、創設後10数年を経過し、この「学術振興後援資金」の内容について見直したところ、その用途を学生や若手研究者への支援に限定しており、未来を見据えた地域医療に貢献できる医療者や研究者の養成の拠点として、また、地域医療を支える中核病院として、これからの地域医療の発展のためには、今まで以上の幅広い事業にも対応できるようにすることが肝要と考え、2016年10月に「学術振興後援資金」を発展的に改組し、新たな「旭川医科大学基金」を創設しました。

創設後は、2018年3月までの間に、6,800万円を超えるご寄附を賜りました。これもひとえに皆様方からのご理解ご協力の賜と深く感謝申し上げます。皆様のご寄附は、旭川医科大学基金運営委員会での審議・検討のもと、ご寄附の目的に沿って、これからの旭川医科大学での事業の支援に充てていくこととしております。

今後とも一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。



旭川医科大学
学長 吉田 晃敏



旭川医科大学
学長補佐(大学基金担当)
原 洵 保 明

目次

- 01 ご挨拶
- 02 実績報告
- 04 事業報告
- 10 座談会
- 16 感謝の集いについて

旭川医科大学基金は、旭川医科大学における教育及び研究活動の充実を図るとともに、地域医療に根ざした医療・福祉のさらなる向上を目指すことを目的として、これまでの学術振興後援資金を発展的に改組し、平成28年10月に創設しました。旭川医科大学基金に対しまして、一方ならぬご理解とご協力を賜り深く御礼申し上げます。

■平成29年度収入

寄附受入総額	123件	27,216,000円
前年度からの繰り越し		51,497,852円
利息		542円
合計 (A)		78,714,394円

■平成29年度支出

支援事業		
●学部学生海外留学助成事業	6件	1,195,660円
●学部学生海外活動助成事業	0件	0円
●大学院博士課程学生支援事業	0件	0円
●留学生支援事業	1件	360,000円
●研究活動助成事業	5件	2,500,000円
●卒業生に対する奨学資金貸与事業	0件	0円
●図書館什器備品整備	1件	1,000,000円
運営費		3,160,780円
事務費		1,008,663円
合計 (B)		9,225,103円

年度末 基金残高 (A - B) …… **69,489,291円**

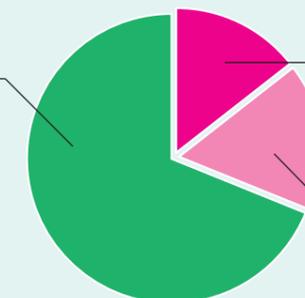
■平成29年度 旭川医科大学基金への寄附内訳

【寄附目的別】

全 般 (101/123件)
20,790,000円

用途特定寄附 (2/123件)
3,000,000円

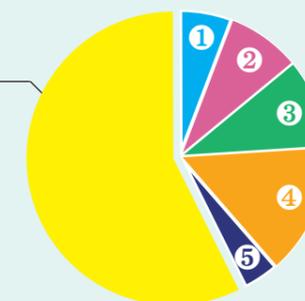
修学支援事業 (20/123件)
3,426,000円



【寄附者属性別】

法人等 (33/123件)
15,600,000円

個人 (90/123件)
11,616,000円



- ① 卒業生 (30件) ……1,590,000円
- ② 保護者 (16件) ……2,240,000円
- ③ 教職員 (25件) ……2,709,000円
- ④ 一 般 (17件) ……3,977,000円
- ⑤ 在学生 (2件) ……1,100,000円

■称号件数

旭川医科大学基金創設以降にお贈りした会員の称号件数 (累計) は以下の通りです。

称号区分	寄附金額		個人	法人等
	個人	法人等		
特別栄誉会員	1,000万円以上	1億円以上	0	0
栄 誉 会 員	500万円以上	1,000万円以上	0	0
特別貢献会員	100万円以上	500万円以上	10	0
貢 献 会 員	50万円以上	300万円以上	4	2
賛 助 会 員	10万円以上	50万円以上	70	31



▲会員の称号をお贈りした寄附者様のお名前を旭川医科大学病院レストラン「ななかまど」前の廊下に設置しています。

(平成30年3月末現在)

学部学生海外留学助成事業

本学学生の国際化を推進し、将来、国際社会の発展に寄与する医師及び看護師の養成に資するため、学部学生が外国の大学への留学又は外国の大学等での語学研修を行う経費を助成します。

支援を受けた学生の声



田中 真緒
医学部医学科 第5学年



留学先： カナダ（McGill大学）

歴史ある大学と多様な言語

カナダのモントリオールにて脳外科の臨床実習をさせていただきました。医療現場で使用される英語力を伸ばすことに加え、日本とは異なる医療現場を経験し視野を広げるためにこのプログラムに応募しました。

実習ではクリニックにて外来見学、ICU回診、手術見学を主に行いました。モントリオールにあるケベック州はフランス語が公用語で、学校では英語で授業が行われ、外来では英語とフランス語が使われていました。ICU回診では身体所見の取り方、バイタルの見方、ドレナージの管理の仕方などを教えていただきました。手術見学では手術室に入り、脳動脈瘤のクリッピング術や救急患者の減圧術を見学するだけでなく、術野に入り補助をする機会もありました。

脳外科の複雑な症例が多だけでなく英語、時にはフランス語が使われるこの実習は一日一日すべてが私にとって貴重で有意義で触発される日々でした。医学だけでなく語学に対しても学習意欲がわき、今後の成長の糧となる素晴らしい経験であったと思います。これから少しでも良い医師になれるよう精進して行こうと思います。

ご寄附により学部学生海外留学助成制度をご支援くださった皆様、留学の準備を助けてくださった方々、今回の留学を支持してくださったすべての皆様に心より御礼申し上げます。



桑原 沙弥佳
医学部医学科 第5学年



留学先： アメリカ合衆国（ピッツバーグ大学）

日本と米国の“ちがい”

留学を希望した理由は、移植医療が日々行われている世界トップレベルの現場を自分の目で見てみたかった事と米国の医療体制を学び、日本との“ちがい”を体感して視野を広げられたからです。

現地でよく、「日本人はどうして臓器提供に抵抗があるのか？」と聞かれました。臓器提供をするということには様々なエレメントが複雑に絡み合っているように思います。米国では日本ほど、この“複雑さ”は感じられませんでした。しかし“複雑さ”が無い方がいいというわけではないと思います。むしろこの“複雑さ”に一人一人がもっと真摯に向き合い自分なりの答えを導いて、それをしっかりと汲み取っていくことこそ、尊い命に向き合うことに繋がるのではないかと思います。

この留学で最も感じたことは国民性の違いです。今後、日本においてより良い医療システムを構築していく上で、日本の国民性にうまく合わせながら外の世界の良い点を取り入れていくことも有効ではないかと考えました。

今回の留学で沢山のことを学び、感じ、経験することができました。これらの宝を今後の人生の糧にして精進していきます。ご寄附によりご支援いただいた皆様をはじめ、このような大変貴重な機会を与えてくださり、留学中も終始支え続けてくださったすべての皆さまに心より深く御礼申し上げます。



修 実夏
医学部看護学科 第3学年



留学先： ベトナム社会主義共和国

ビジネスも医療も「チーム」が重要

私はインターンシップ生として海外ビジネスの新規事業の企画を行うという体験をしてきました。医療以外の分野においても自分の見聞を広めたいという思いがあり、参加を決めました。

このプログラムで得た最も大きな気付きは、ビジネスもまたチームで行うものであるということです。「チーム医療」はすでに浸透していますが、ビジネスにおいては個人戦というようなイメージを抱いていました。しかし実践してみると、密なコミュニケーションがいかに重要であるかを感じました。異なるバックグラウンドを持つメンバーと企画の詳細を話し合い進めていくことや、マネージャーと共通認識を得ていく過程は、慣れないということもあり時間がかかり大変でした。しかし、意思疎通が取れていないと、そこから作り出される企画はまとまりがなく完成度の低い企画になる実感が確かにあり、チーム内でとことん話し合い、納得しながら進めていくことの重要性を感じました。短い時間の中で納得のいく企画を完成させることは難しかったですが、短い間に患者にとってできる限り最善の形で退院できるよう支援を行う看護職と似たものを感じました。この経験を今後活かしていきたいと思います。

ご寄附によりご支援いただいた皆様、支援を受けるにあたりサポートしてくださった方々に感謝申し上げます。



平田 朋浩
医学部医学科 第4学年



留学先： タイ王国（マヒドン大学）

日本では経験できない実践的な研修

タイにあるマヒドン大学は熱帯医学において権威ある大学で、この大学での短期研修に参加させていただきました。

例えば寄生虫に関しては、タイ独特の文化などを交えながら疫学・診断・治療について講義がありました。マヒドン大学は検体が多くあり、実際に患者さんの検体から寄生虫卵を同定し、原因を特定するという実践的な研修も行われました。

医療先進国と言われる日本ですが、つい最近まで熱帯病として有名な寄生虫病が多く確認されていた時代を経験しています。直近の話題としては2014年のエボラウイルス病パンデミックがあります。このように熱帯感染症の脅威は身近にあります。日本で熱帯医学を深く学ぶ機会は多くありません。今回の研修は現役の医師など医療従事者をメインとしたものでしたが、学生として特別に参加することができました。1週間という短い期間でしたが、今後の勉強の方針や将来設計の糧とすることができ密度の濃い研修となりました。

日本では滅多に経験できないこの分野の研修を受けるためには今回のように海外へ赴かなければいけないと思います。その際、最も障壁となったのが金銭面でした。今回このような支援事業を利用して学んだ経験は決して無駄にせず今後活かしていこうと思います。

支援を受けた研究者の声



野呂 昇平
脳神経外科学講座 / 助教

研究テーマ

高速度カメラを用いた
顕微鏡下における脳血管状態の観察

■研究の概要

スローモーション撮影が可能なハイスピードカメラを手術用顕微鏡に搭載し、術中蛍光造影剤としてフルオレセインを使用することで、微細な血管構築や血流を詳細に把握し、術中モニタリングの一助としました。また、術中、術後に血流解析ソフトで解析することと血流方向や速度などのパラメーターを求めました。

■寄附者様への謝辞

本研究はハイスピードカメラを始め、フィルター、薬剤など多額の研究費を使用するため機材の多くをデモ機として使用致しました。フィルターや薬剤、研修費などは頂いた助成金から捻出させていただき、大変感謝しております。

■研究の進捗

本研究は対象患者が限定されるため、現在8症例の研究を行っております。従来の撮影でははっきりしなかった血流方向や速度についてはハイスピードカメラを使用することで、詳細な血行動態が得ることができるようになりましたが、カメラの条件や投与経路などにより大きく結果が変わってくるため、期待したとおりの結果にならないこともあります。できれば年内中に20症例の研究を行い、結果を残したいと思います。

■今後に向けて

今後は再現性などを確認するためシリコンチューブを用いたものや、様々なカメラ条件で研究を行い、術中モニタリングとしての地位を確立し、臨床医学に応用していく予定です。



伊勢 隼人
外科学講座（心臓大血管外科学分野）/ 助教

研究テーマ

レーザースペックルフローグラフィを用いた胸部
大動脈手術における逆行性脳灌流プロトコルの検討

■研究概要

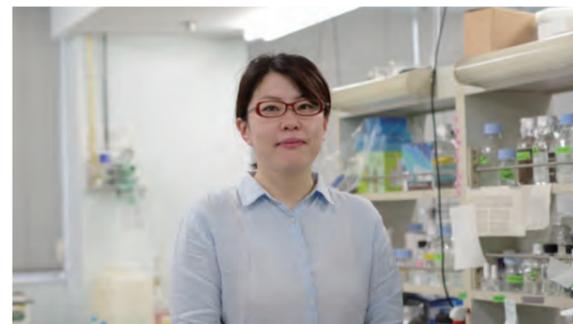
大動脈外科手術において、低体温循環停止法を用いた際には、通常的心臓手術と比較して出血量が増加することが知られています。出血量の増加には凝固異常が関係していますが、低体温や人工心肺使用の影響によって、凝固系のどの部分で凝固異常が起きているのかをブタを用いて明らかにしようと思いました。

■寄附者様への謝辞

これまで当科では、旧第一外科時代を含めても大動物を用いた実験はしばらく行っておりませんでした。私はこれまで研究実績に乏しく、研究費を持っておりませんでした。今回、旭川医科大学基金のご寄附を頂いたことで大動物実験のスタートに必要な準備を行うことが出来ました。感謝申し上げます。

■研究の進捗・今後に向けて

移植医工学治療開発講座の松野特任教授、佐武実験助手及び当院診療工学技士の方々の協力により、これまで2例、ブタで人工心肺を用いた実験を行いました。今後は実験をより洗練させ、研究課題の解決を目指したいと考えております。



中澤 瞳
解剖学講座（機能形態学分野）/ 助教

研究テーマ

細胞外プロテアーゼ・ニューロプシンの
記憶形成における生体内での作用機構の解明

■研究概要

海馬や扁桃体に発現する細胞外プロテアーゼ・ニューロプシン(NP)は神経活動依存的に活性化し、基質の切断による修飾により神経可塑性に関わると考えられています。本研究では、実際に記憶形成時にNPが基質の修飾を行うのか、またその下流シグナルが記憶形成に関与するのか、マウスを用いた行動解析により検討しました。

■寄附者様への謝辞

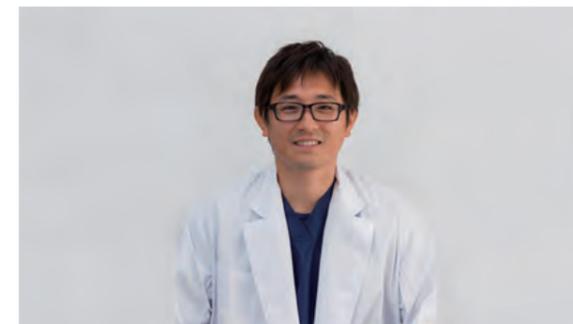
旭川医科大学基金支援事業からのご支援により本研究を進めることができたことを感謝いたします。本事業に採択されたことで、経済的な面はもちろんのこと、精神的にも支援されていると感じました。この支援に応えられるよう今後も奮闘していきたいと思っております。

■研究の進捗

NP遺伝子欠損マウスは社会性行動の異常は認められませんでした。新規・既知のマウスの弁別ができず、社会性記憶が障害されていました。NP遺伝子欠損マウスの脳室内に神経栄養因子NRG1を投与し、ErbB4受容体を活性化させると、障害されていた社会性記憶が野生型マウスと同レベルまで回復し、これより、NPはNRG1-ErbB4シグナルを介して社会性記憶に関与することが分かりました。

■今後に向けて

ヒトNP遺伝子のSNPs解析より、特定の部分のSNPが言語性IQや注意力・集中度といった認知機能及び双極性障害のような精神疾患と関与することが報告されています。そのため、今後は本解析によって明らかとなったNP-NRG1-ErbB4シグナルの制御が精神疾患による認知機能障害の治療標的となるのかを明らかにしていきます。



内田 大貴
外科学講座（血管・呼吸・腫瘍病態外科学分野）/ 助教

研究テーマ

核酸医薬(CRE decoy ODN)を用いた
血管内膜肥厚抑制療法の開発

■研究概要

血管内膜肥厚(IH)に対する有効な予防、治療法は確立されていません。当教室のヒト臨床サンプルを用いた研究で得られた知見から、転写因子CREB結合サイトのCRE活性を核酸医薬(decoy ODN)を用い制御することでIHを抑制する治療法の開発を目指しました。

■寄附者様への謝辞

本研究に対するご支援により、追加実験及び成果発表において有効に活用させていただきましました。結果が広く社会に還元できるよう、これからも研究活動を続けて参りたいと思っております。ありがとうございました。

■研究の進捗

米国心臓協会学術集会等の国際学会で成果を報告することができ、アジア血管外科学会では Best Poster Award を受賞しました。また、現在 Journal of Vascular Surgery 誌上投稿中です。

■今後に向けて

血管内膜肥厚の抑制は血管外科においては未だ解決策のない長年の研究テーマであります。Globalにみても重症下肢虚血に対する有数のバイパス症例数を誇る当教室から、また新たな研究、切り口でこの難題に取り組んでいきたいと考えております。

研究活動助成事業

本学の若手研究者（大学院学生を含む）の研究活動を支援します。

支援を受けた研究者の声



太田 雄

大学院博士課程（第二内科 / 医員）

研究テーマ

細胞外小胞 EV を介した microRNA による胆管癌進展制御機構の解明

■研究概要

胆管癌は早期より浸潤・転移を来し、消化器癌の中でも予後不良な癌腫の一つです。ゆえに、浸潤・転移制御機構の解明は喫緊の課題と考えます。一方、上皮系細胞が間葉系細胞へと形質転換する現象である上皮間葉形質転換 (EMT) が、癌浸潤や転移過程に大きく関わる事が知られています。近年、遺伝子の発現・機能を制御する機能性 RNA の 1 つであるマイクロ RNA(miRNA) が、細胞から分泌される細胞外小胞 (EV) に運搬され、癌細胞を含めた周囲微小環境へ影響を与えることが報告されています。本研究では、胆管癌の浸潤や転移に重要な EMT を抑制する新規 miRNA を同定し、EV を介した miRNA 輸送機構の解明を目的に研究を行いました。

■寄附者様への謝辞

旭川医科大学大学院博士課程 3 年生の 1 年間、旭川医科大学基金から助成して頂きました。自身の研究に対する理解が深まると共に新たな疑問が生まれ、さらなる研究意欲が湧いてくる時期でした。その反面、研究活動にかかる経済面への理解も深まり、日々節約しながら研究を行って参りました。そのような中、思うような研究成果が出ない事も多く、挫けそうにもなりましたが、経済的な面での支援は大きな支えとなりました。旭川医科大学基金より助成していただいた事に心より感謝いたします。

■研究の進捗

マイクロアレイによる網羅的な解析の結果より、EMT 抑制性候補 miRNA として miR-30e を同定しました。MiR-30e は正常胆管上皮細胞に比べ多くの胆管癌細胞において発現が低下しており、癌抑制遺伝子として働く miRNA であると予想されました。さらに検証を重ねた結果、miR-30e は EV を介して細胞間伝達されることにより、癌細胞周囲の微小環境全体において EMT を抑制し、胆管癌の浸潤や転移能を減弱させる事を見出しました (Ota Y et al, Oncotarget. 2018 Mar 27;9(23):16400-16417.)。

■今後に向けて

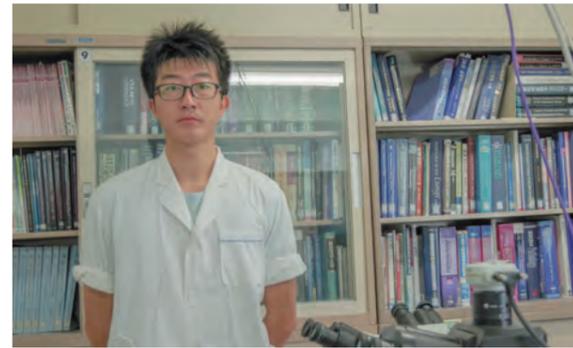
EMT は癌の浸潤や転移とともに抗癌剤抵抗性にも関わる事がわかっています。本研究結果から、miR-30e は治療抵抗性の強い胆管癌における新規治療標的としての可能性も期待されます。また、EV は体液中を循環しているため、EV 中 miRNA の発現変化は体液診断 (Liquid biopsy) として、更には核酸のデリバリーツールとしての有用性もあると考えています。今後はさらに、臨床検体を用いた研究へと展開して参りたいと思います。これからも胆管癌に苦しむ患者様の予後延長に貢献できるよう研究に励みたいと思います。



留学生支援事業

本学で学ぶ外国人留学生が、より修学・研究に打ち込めるよう、奨学資金の支援をします。

支援を受けた学生の声



孟 玲童 モウ レイドウ

大学院博士課程 留学生（中華人民共和国）

一人でも多くの患者さんを救うことが私の使命

この度は、旭川医科大学基金によりご支援をいただき、心から感謝いたします。

私は現在、病理学講座腫瘍病理分野で肝線維化のメカニズム解析と新規治療法の開発について研究しております。肝線維化に中心的な役割を担う肝星細胞の活性化のメカニズ

ムを解析し、特に Src 活性化を介した新しい肝線維化治療の可能性を探求しております。具体的には、マウスやラットへの四塩化炭素などの投与実験と、これらに対する治療候補薬物の定期的投与、ラット肝からの肝星細胞分離・培養実験を行い、組織標本作製、免疫組織化学、形態定量解析、分子細胞生物学的解析など、研究の遂行に欠かせない事をたくさん勉強しています。ここで学び、自分の学問知識を増やすことで、有意義な人生が導かれるものと信じています。

留学中は学業と研究に専念することが何よりも大切です。旭川医科大学基金の支援をいただいた事で、本当に助かりました。おかげさまで、研究には全力投球ができています。研究生として医療に貢献できて、嬉しく思います。

旭川医科大学基金の支援をいただき、学業と研究を一生懸命できたことは、とても幸せです。将来医者になり、一人でも多くの患者さんの命を救う事が、私の使命です。

使途特定のご寄附による支援事業

使途を特定した大切なご寄附を寄附者様のご意向に沿って使わせていただきます。



使途特定のご寄附により、本学図書館に新しい展示棚とテーブルを設置しました

この度、図書館整備のためにと、使途を特定して旭川医科大学基金へご寄附いただいた資金により、図書館に新しい展示棚と多目的用途の組み合わせテーブルを設置いたしました。

旭川医科大学図書館は、平成 27 年 4 月にリニューアルし、学生・教職員の学習・教育・研究をサポートする施設として運用しています。

館内は、約 8 万冊の医学・看護学などの専門書や、約 4 千タイトルの学術雑誌が利用できるほか、本学の建学の精神である地域医療に関する図書を集めた「地域医療書コーナー」などを設置しています。

今回新しく設置した展示棚とテーブルには、季節や世の中の話に合った様々な企画を行っています。

支援を受けての
成果・成長を
振り返る

支援事業に採択された
若手研究者と
現役学生に
インタビュー



小山 光真 Mitsumasa Koyama
医学部医学科第3学年
(留学時第2学年)

【留学先】
ベトナム社会主義共和国

【プログラム名】
海外ビジネス武者修行プログラム



柏木 陸 Riku Kashiwagi
医学部医学科第4学年
(留学時第2学年)

【留学先】
スタンフォード大学 (アメリカ合衆国)

【プログラム名】
Exploring Health Care プログラム



工藤 直志 Tadashi Kudo
一般教育・社会学 講師

【研究テーマ】
現代のセルフケアと受療行動に
対応した社会調査の実施に向けた基
礎的研究



松田 泰幸 Yasuyuki Matsuda
微生物学講座 助教

【研究テーマ】
新規コレクチンCL-K1の精製法
の確立およびCL-K1相互作用
分子の探索

■ 支援事業に応募しようとしたきっかけ

松田：研究活動するには資金が必要だということが前提にありまして、科学研究費補助金というものがありますが(以下「科研費」といいます。)、ある科研費に採択されている間は、一部を除き、基本的に重複して別の科研費をもらうことができません。プロジェクトが切れて、切り替えのタイミングで科研費を獲得できないと資金がなくなり、研究活動ができなくなることがあります。そうすると、いろんな所にアンテナを伸ばして資金を獲得していくのが…

柏木：重要ですね。

松田：そうなんです。また、私の中では研究のプロジェクトの中で今までとは違うようなことが解り始めて、新規の研究をやろうとしたんですが、その場合、当然ながら失敗も多くなる。そうすると、また当然お金がかかってくる。そういったタイミングでちょうど支援事業の案内が来たんです。

柏木：僕は留学を考えた時に、資金を支援してくれるようなシステムが大学にあればいいなと思って、学生支援課に相談に行ったのがきっかけでした。その時に、たまたま支援事業の募集があり、その支援をいただいてスタンフォード大学のプログラムに行くことができました。

小山：そのプログラムはどんなものですか？

柏木：スタンフォード大学での医療を実際に見て、どんな医療をしているか、アメリカと日本の医療の差、システムの差を学びました。それまで日本の中において、日本の医療を当たり前だと思ってたんですけど、アメリカに行ってみて、初めて知ることがたくさんありました。

小山：例えば？

柏木：例えば医療保険制度ですね。日本では国民皆保険があって、病院でも医療費3割負担というのが当たり前ですが、アメリカで保険に入っていないければ全額負担ですし、実はアメリカ国民の自己破産の原因の1位は医療費なんです。

小山：え！1位？

柏木：だから実際にそれが原因で死亡する人や、破産宣告を受ける人たちが沢山いる。でも、日本では高齢者だったら1割負担だし、若者の僕たちだったら3割負担で済んでいる。というように、日本にいるから当たり前だと思ってたことが、外にできることで、当たり前じゃないんだと気付きましたし、逆に日本の医療の良くないところも見えました。そこから学んだのは、比較対象がないと本当の自分の姿って見えないうことなんです。そういった意味で海外留学というのは、重要だと思います。

小山：僕はですね、先輩が海外ビジネス武者修行プログラムに行っすごく良かった、ということで紹介してもらったん



ですが、正直言って、医学に直接関係するプログラムでもないですし、こう言ったらなんですけど、ちょっとわかりづらいというか…

工藤：プログラムの名前がね(笑)。

小山：そう、名前が(笑)。実績はちゃんとあるんですけど、応募するか自分でも迷ってた時に、こういう支援事業があるということも先輩に教えてもらって、一步踏み出しやすくなりました。向こうでは、医療とは全く別のビジネスや、チームビルディングを勉強しました。医大だと医療関係者が多くを占めていますが、今回の海外ビジネス研修では医療関係じゃない人も繋がることができましたし、いろんな視点から自分自身を見直す機会もできて、いい経験になったなと思います。

—小山さんが行かれたプログラムの内容を聞かせてください。

小山：ベトナムのホイアンという世界遺産都市があるんですが、そこに僕ら学生が行って、4、5人ずつのチームを作る。

松田：そのチームのメンバーは全然違う大学の人達？

小山：全く違う人達です。実際にあるお店にチームとして配属されて、新しいプロジェクトを作るんです。例えば、商品を開発して販売するとか、お店の内装や外装のプロモーションを変えるとか、ビジネス経験を通していろんなことを学ぼう、というプログラムでした。ベトナムなので英語が通じる方もいれば、なかなか通じない方もいます。英語でプレゼンテーションしたり、ビジネス交渉の時も、英語が通じないと

きはボディランゲージを使ったりとか。僕、外国語が苦手なんで、難しかったです。そういういろんな壁もありました。

—ありがとうございました。先生方の研究の成果もお聞かせください。

工藤：こちらに来て1年目に、社会調査を新しく実施したいと思い、支援していただいて、その基礎的なところを整えるために資金を使いました。その後、学内でいるんな先生方とのネットワークなどもでき、共同研究も立ち上げようという話もできました。主な成果は文献を調べて、過去の先行研究と比較して、新しい質問項目をどうすべきかということを検討しました。そういったところも使いながら、研究を継続していきたいと思っています。

松田：私の研究テーマはざっくり言うと、タンパク質科学です。そのタンパク質が生理活性を司っている主役の一つだろうと考えて、その中で一番興味を持ったのが免疫でした。今やっているのが、免疫学の「コレクチン」というタンパク質です。そのコレクチンが、免疫の中では補体系に関わっているんで、それをずっと研究してきたんです。ですが、近年免疫だけでなく、ヒトの形態形成にも関わるといのが解ってきたんです。

柏木：え、形態形成ですか？

松田：はい。今までずっと免疫学の分野でやってきたコレクチンが、実はそれ以外の機能も持つというのはおもしろいなと思っていて。形態形成に関わる分子は何があるんだろう、その全容を解明したいと。

小山：おもしろいですね。

松田：成果ですが、その前に課題があるんです。私の扱ってるタンパク質は、実は少ない量しか血中になくて、これまで報告されてる文献は主に遺伝子組換えによって違う生物の中で無理矢理作らせたタンパク質を使って解析しています。そこである程度の情報は得られるけれど実際に自分たちの身体の中にある状態の物を扱わないと、本来のことは見てるとは限らない。

柏木：それは技術的な制限があったんですか？

松田：量的に難しい。できないことはないけれども、時間がかかるのと、やっぱりコストがかかる。これでやっと基金からの支援に繋がりますね(笑)。

一同：笑

松田：それが課題で、とにかく自分の扱うタンパク質(コレクチン)をまず、ヒトの身体の中から実際に取ってくる。その方法が確立されてないので、トライしました。さらにコレクチンは形態形成に関わるタンパク質なので、取ってきたコレクチンに相互作用(結合)している別の因子を見つけることができれば、それも形態形成に関わる可能性が十分にある。こうして芋づる式に色んな物を同定していけば最終的には生理現象全体を分子レベルで表現できるかな、という目的で。結果としては、物を取ることができました。

一同：おお!!

工藤：コレクチンが取れたのですね？

松田：はい。ヒトの血液の中から取ることが出来て。また他にどんな分子が相互作用しているのかについてもある程度解ってきました。これからそういった分子も新しい解析のターゲットとして、最終的には形態形成がどのようにして起こるのか、それが解ったら、例えば形態形成異常関連の遺伝子診断に繋げるだとか、そういう病気が起こらないようにする、あるいは正常に近づけるように、という方向に持って行けたらいいなと。

■ 支援事業に採択された時の気持ち

小山：僕らへの支援事業は採択人数が1年に10人までで、どのくらいの応募人数がいるかわからないですし、不安な気持ちの中で採択されたので、とにかく安心しました。前の年までは助成額は10万円までだったんですけど、僕らの年から20万円出してもらえることになったんですよ。

柏木：そうなの!?それはすごいね!(※柏木さんの留学の際の助成額は上限10万円)

小山：10万円というだけでもすごいのに、20万円なんて学生にとっては大金の大金で。それを自分で捻出しようと思ったら、僕のアルバイト…週に1回やってるんですけど、その半年分くらいなんです。それを自分で稼いで使うと考えたら、なかなか一歩踏み出せないこともあると思います。留学にそのお金をかけるためには、これとこれを諦めて、みたいな。



でも僕はありがたいことに支援していただけたので、一歩踏み出すことができました。それで行くことができたプログラムのお蔭で自分が成長するために色んな課題点や、目標を見つけることができたので、すごく嬉しいです。

工藤：支援がなかったら行けてなかった可能性もありましたか？

小山：僕は3月に行ったんですけど、そのプログラムのキャンセルが2月末までで、1月に採択されたので、もしそれがなかったとしたら、いろいろと考えてキャンセルしてた可能性はあります。

工藤：かなり大きな金額ですもんね。半年アルバイトして捻出できるかっていう金額でしたよね。

小山：そうなんです、学生としては、なかなか…

柏木：20万か…いいなあ…（笑）僕の時は最大限で10万って言われてて、でも10万ももらえるんだって思ってたんですが、今は20万…

一同：笑

一それだけの価値がある、または成果があったと思われませんか？

柏木：学生の時は時間があってもお金がない、社会人、医者になってからはお金ができるけど時間がないとよく言われますが、経験を得るのにはどうしても時間が必要だと思います。特に海外に行くことに関しては長くられないと、あまり成果が得られません。だからこそ時間がある学生の間にこそ海外等で学べることは沢山あると思います。そこで、大学が経済面での後押しをすると、学生の学びの幅がぐっと広がるんだと思います。こういった支援は他大学では無いところも実は多く、支援事業が大学に整備されていることを在学生として誇りに思っています。

小山：僕は何か具体的な結果を残したとかはないんですが、そこで得た考え方や経験は将来確実に活きますと思います。例えば、そこで学んだ大きなこととして、チームをどううまく作って一つの目的を実現するか、というのがあります。僕は今、チームビルディングとかファシリテーションを進めるというノンテクニカルスキルを学んでる途中なんですけど、そこでこの経験が生きています。将来自分が医療者になって、チームで動かしていく上でも役に立つと思います。

松田：基金の支援は医学に関する活動のみへの支援なのか

など思っていたんですが、それ以外のことでも検討していただけっていうことなんですね。

柏木：本当に有難いお話です。医学だけにこだわらず、20万円という大きい金額を学生に支援してくれているということは、大学自体が学生にいろいろな経験を持たせることを良しとし、さらに経済的にも後押しをしてくれているということですよ。

工藤：寄附されている方はこういうふうに使ってほしいという希望はあるんですか？

一修学支援事業、教育研究支援事業、地域医療支援事業などがあり、この中のどれにを使って貰ってもいいですよ、という寄附をされる方が多いです。特定資金では、ご自身の病気の研究のために使ってほしいということでご寄附を受けたもあります。その他に学校の整備に使ってくださいとか、いろいろなお寄附があります。

工藤：そう考えるとありがたいというか、自分も社会学の研究者なんで、よく言われるんですが、それ何の役に立つんですかと言われると、先ほど話に出た科研費の申請書でも、社会的貢献は何かと言われるんですけど、なかなかその…

松田：紡ぎ出せないですよ。

工藤：そんなすぐに役に立つ物が出せないというのが研究の難しいところでもあります。先ほど学生さんの、特に小山さんが行かれたプログラムが「医学部学生として役に立つのか」と言われると…

小山：そうですね。

工藤：なかなか難しいところがあると思うんですけど、これくらいの年代の方が、外の場所に滞在して何かするとか、全然医学と関係ないことをみんなでやってみるとか、医学部じゃない人とコミュニケーションをとってみるといのは、すぐには役に立たないと思うのですが、何かの時のきっかけとか、手がかりになり得ると思うんですよ。そういう無形のところにも支援してもらえるというのは、非常にありがたいなと思います。

柏木：一見、物に対してお金を払う方が目に見えやすくてわかりやすいのですが、同じ10万円でも物に対して払うのと経験を得るために払うのだと10年後、20年後に選ってくる物が大きく違うと思います。僕たちも将来大学に貢献することで、支援して頂いたものを還元できたら、と思います。

■ 支援者への思い

工藤：繰り返しになるので恐縮なんですけど、旭川医科大学に移ってきて、学内に社会学者がいないということもあり、かなり心細かった部分もあったんですね。そんな時にこの支援事業に採択されて、もちろん物質的な面も非常にありがたかったですけども、ここで研究していけそうだなと、メンタルの方にもいい効果がありました。さきほど、お話にもありましたけど、資金がないと研究できないのは、悲しいんですけど、そのとおりです。もちろん資金があって研究できる。それだけでなくメンタルの安定という部分にも支援事業は非常に良い影響があります。今後とも温かいご支援をいただけるといいなと思います。

松田：基本的には一緒ですよ。自分の研究でいうと、資金がないというのが大きいんです。研究活動自体が綱渡りで、金銭的にも精神的にも大変で。ですから、こういった支援事業があると、すごくありがたいです。1年間使わせていただいて、成果も少しですけどあげることができて、本当に良かったと思います。こういった制度は支援者の気持ちで成り立っているものですから、私たちはそういった思いにきちんと応えるような形で、誠心誠意活動していくのが大事だと

思っています。ぜひ、これからの後輩の研究者、学生の皆さんにより多くの支援をしていただけますよう、よろしく願いいたします。

柏木：とにかく感謝の念しかありません。手厚い支援をとおして僕たち学生に対する成長への期待を強く感じましたし、その期待に応えていきたいとすごく思いました。私達もこれをきっかけに少しでも成長して、大学や地域社会に対して還元できたらなと思っています。

小山：僕らの留学は先生方とは違って、明確な研究や成果とかも具体的に無くて、経験という保証もないような、自己投資ならまだしも、人に投資するには難しいものだと思うんです。でも、支援をしていただいて、実際に留学に行った学生としては、金額以上の価値を見い出せました。今後、それを踏まえてさらに勉強や経験をして、テコの原理じゃないですけど、レバレッジを効かせて、いろんな価値を作り出すことができるような気持ちでいます。今後も、支援事業が続くことで、旭川医科大学の学生が世界に対して敷居が低くなり、色んな経験を得て、色んな成果も出せるようになると思います。支援をしていただいている方々に対しては、深く感謝しています。



旭川医科大学基金「感謝の集い」の実施

平成29年11月14日に旭川医科大学基金の寄附者の皆様をお招きした「感謝の集い」を旭川医科大学病院内のレストランななかまどを会場として開催しました。

平成28年10月の旭川医科大学基金創設後、初めての開催となる「感謝の集い」には寄附者の皆様とご同伴者を併せ29名の方々にご参加をいただき、本学からは吉田学長を始め、理事、副学長などの大学役職員の他、基金の支援を受けた学生・留学生も参加しました。

はじめに貢献会員・特別貢献会員の皆様へ感謝状を贈呈いたしました。また、吉田学長からグローバルに活躍できる医療者の養成などの、教育・研究等に関する講演の後、原淵学長補佐から寄附金の活用および収支状況等についての報告を行いました。

寄附者の皆様との歓談時間には、支援を受けた学生・留学生から活動成果報告が行われ、日ごろのご支援に対する感謝の気持ちをお伝えすることができました。最後に、原淵学長補佐による閉会の挨拶の後、盛会のうちに終了いたしました。



旭川医科大学基金へのご支援のお願い

旭川医科大学基金への更なるご理解・ご支援をよろしくお願い申し上げます。

お申し込み方法：①クレジットカード、コンビニエンスストアでの払込

②郵便振替払込

③大学窓口への直接払込

※詳しくは下記より旭川医科大学基金ホームページをご参照ください。

旭川医科大学基金 検索



お問い合わせ

旭川医科大学総務部総務課基金事務係

〒078-8510

北海道旭川市緑が丘東2条1丁目1番1号

電話：0166-68-2118

メール：kikin@asahikawa-med.ac.jp

2018年11月発行

